手帳

# 〝卑弥呼の鏡〟ずさんな成分調査

古代の青銅鏡として最も有名なのは三角縁神獣鏡である。倭国の女王卑弥呼が239年に中国・魏へ使節を送った際に、下賜された鏡であるとする有力な説があるからだ。しかし、中国から1面も発見されていないことから、国内で製作されたとする説も根強い。

膠着状態にあるこの論争に一石を投ずるものとして話題になったのが、昨年5月、京都市の泉屋博古館が記者発表した蛍光エックス線による調査結果である。三角縁神獣鏡はこれまでの研究上、中国で作られ日本にもたらされたとされる舶載鏡と、それをまねて日本で作ったとされる仿製鏡に区別されている。今回の分析では、青銅鏡の微量成分であるアンチモンと銀の錫との比が、舶載鏡では他の中国製の鏡と、仿製鏡は日本製であることが明らかな他の鏡と、それぞれほぼ一致したという。

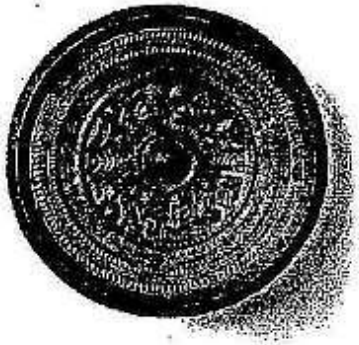
原材料を輸入して製作された可能性もあり、成分の一致が必ずしも製作地の一致を示すわけではない、との反論もあった。しかし、もし原材料が輸入されて、すべての三角縁神獣鏡が日本で製作されたのだとしたら、どの鏡も中国鏡の成分と似通ってくるはず。そうならなかったということは、中国鏡説に有利な分析結果であると受け止められたのだった。

しかし、今月発売された「季刊邪馬台国87号」で、韓国・慶尚大招聘教授の新井宏氏(金属考古学)が、この分析の重大な欠陥を指摘した。青銅鏡の主成分は銅、錫、鉛の三種類。アンチモンはこれらのうち錫鉱石に混入していた不純物であると、博古館は見なしていた。しかし、新井氏はむしろ銅鉱石に含まれていたものであると、データをそろえて主張。博古館が鏡の分類に用いた、アンチモンと銀の含有率による相関関係は全く意味のないものであると、論難した。

新井氏はそれを証明するものとして、32面もの三角縁神獣鏡が出土したことで知られる京都府の椿井大塚山古墳の調査報告書(1998年)を活用。ここに掲載された各鏡の微量成分の値に基づき、博古館と同じ計算を試みたところ、同古墳出土の舶載鏡とされる鏡の多くが、なんと仿製鏡の分布域に収まったことを明らかにした。意外なことに、泉屋博古館の館長は、この報告書を執筆した日本考古学界の重鎮、樋口隆康・京大名誉教授である。

泉屋博古館は「今回の分析結果はアンチモンの由来には左右されない」と反論しているが、説得力に欠くずさんな発表であったことには違いない。というわけで、三角縁神獣鏡の素性は依然として闇の中だ。

(片岡　正人記者)



京都府・久津川車塚古墳出土の三角縁神獣鏡(泉屋博古館蔵)